# 異文化交流プログラムを通した異文化コミュニケーションの意義と課題

松田　安隆*，ジョン・ハーバート*

# The Benefits and Matters to Consider for Cross-cultural Communication through Cross-cultural Experience

Yasutaka MATSUDA, John C. HERBERT

**ABSTRACT**

In the world of globalization, Kosens are expected to develop engineers who will actively be involved in overseas enterprises. The Institute of Colleges of Technology, INCT, started the Asian Students Kosen Experience Program in 2010. The purpose of this program is to invite students from Asian countries and help them to understand and gain interests in overseas study at Kosens in Japan. But, this program is also a good opportunity for Kosen students who support the Asinan students, and this helps to improve Kosen students' communicative competence in English. Akashi Kosen held the program in 2011. This report gives an outline of the 2010 program and refers to the benefits and matters to consider for the cross cultural experience.

**KEY WORDS**: international exchange, cross cultural communication, cross cultural experience, global human resource development

## １. まえがき

国立高等専門学校機構では，中期目標・計画において，国の「留学生30万人計画」の方針のもと積極的な活動を展開するとしており，その一環として，アジア地域の学生を日本に招聘し，高等専門学校の生活体験を通じて，日本への留学，高等専門学校への留学意識の涵養を図るために，アジアの学生の高専体験プログラムを実施している．高専機構留学生交流促進センター主催で第1回目のアジアの学生の高専体験プログラムが平成22年度に沖縄高専で実施され，平成23年度に第2回目のプログラムを明石高専で実施した．明石でのプログラムでは10の国と地域から13チーム41名の学生と引率教員15名が参加し，高専生もプログラムアシスタントとして13名が海外の学生と行動をともにした．プログラム期間中の公用語は英語として1週間のスケジュールをこなした．

本報告では，プログラムの運営内容の概要を示すとともに，海外からの短期留学生を受け入れるというプログラムを実施することの意義や問題点等を提示し，高専において異文化交流プログラムを今後どのように展開していくべきか，また学生の英語力を段階的に向上させ，異文化コミュニケション能力を向上させるためのシステムをいかに構築していくべきかについて論じていきたい．

## ２. アジアの学生の高専体験プログラム2011の概要

開催期間は平成23年9月12日（月）～9月17日（土）の日程でプログラムを実施した（一部のチームは18日の帰国）．参加校は以下の13チームである．キングモンクット工科大学，泰日工業大学（以上タイ），成都航空職業技術学院，成都機械電子専科学校（以上中国），ホーチミン市工科大学2チーム（ベトナム），キョンヒ大学（韓国），ラオス国立大学（ラオス），スラバヤ工科大学（インドネシア），ダッカシティカレッジ，エデンモヒラカレッジ，ガバメントサイエンスカレッジ3校による混成

*一般科目（英語）

チーム（バングラデシュ），テマセクポリテク（シンガポール）IVE（香港），高雄第一科技大（台湾）．

期間中の主な活動内容等は以下の通りである．

9月12日（月）寮に到着，寮の規則等の説明

9月13日（火）開講式，高専制度の説明，オリエンテーション，参加者自己紹介，留学生 OB によるプレゼン，キャンパス見学，参加チームによるプレゼン，歓迎会

9月14日（水）講義（機械工学，電気情報，都市システム，建築，一般科目），参加チームのプレゼン

9月15日（木）工場見学（川崎重工，神戸製鋼所），歴史・文化施設見学（人と防災未来センター，明石海峡大橋），引率教員との懇談

9月16日（金）ものづくり体験授業（フォトフレーム，3D コンピュータグラフィックス，ブリッジコンペティション，姫路城見学・考古博物館見学），閉講式，お別れ会

9月17日（土）解散，一部の参加者（大阪見学）

## ３．プログラム運営上の工夫について

高専機構及び文部科学省から海外の参加が，高専教育の特色がわかるように，また学生が将来日本への留学をしたくなるようなプログラムの構成をするように依頼をうけていた．そこで，高専を体験してもらうために，引率教員を含めて参加者全員に学生寮に泊まってもらい，寮の規則・日課どおりに生活してもらった．

高専生によるプレゼンテーションでは，兵庫県，明石の紹介，学校の年間行事及び具体的な研究活動の紹介を行った．各学科の講義では，どのようなことを学ぶかを具体的に示すことにし，その際，授業科目名の羅列にならないようにした．また，それぞれの学科の進路の状況やそれぞれの専門が社会でどのように活かされているかの説明をした．機械工学科は，学生がエコランの取組事例について紹介し，機械工学に関する講義も行った．電気情報工学科は，日本の発電に関する技術とトランジスタ素子の開発について，歴史的な状況を踏まえて説明を行った．都市システム工学科は，防災に関する研究の紹介をした．建築学科は，日本の伝統建築の紹介を行った．一般科目は，日本の産業史を中心に，日本が工業化していく過程を紹介した．

ものづくり体験授業では，少しレベルを高くして参加者の年齢に合うようにした．

工場見学及び日本文化，歴史的施設の見学では，兵庫県国際交流協会が過去に実施した経験をもとに，外国人に評判の良いコースを選定した．

学生のプレゼンは内容等を事前にチェックし，本番に向けてのシミュレーションは出来る範囲で実施した．英語の発表については，外国人教員による英文チェックも行った．

プログラムのしおりや教職員スタッフ用，学生アシスタント用のスケジュール表などは英文で統一した．事務担当者が作成した日本語による分担表は補助的なものとし，英文のものを最優先して情報の統一化を図った．

## ４．アンケート結果による評価

アンケート集計結果を図１～図８に示す．

（１）開催地について

おおむね良好な結果が得られた．交通の便が良く，周辺に姫路城，明石海峡大橋，神戸，海岸，ショッピングセンター，博物館，工場などさまざまな施設や景勝地があったので好評だった．

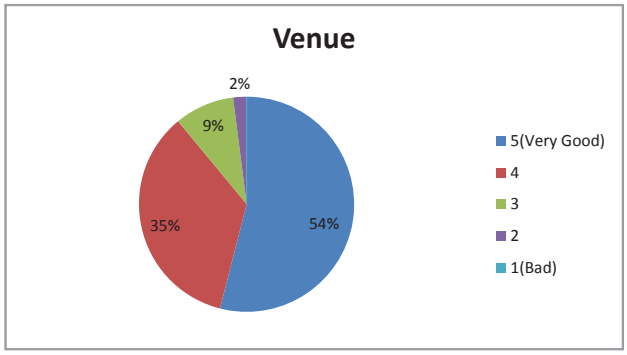


図１　開催地

（２）寮について

海外からの参加者は，自国との連絡をインターネットでとろうとするので，最初インターネットの接続がスムーズにいかなかったことに不満を感じている人もいた．

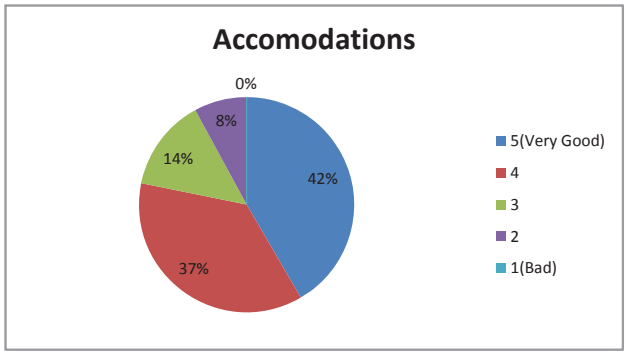


図２　宿泊

（３）風呂とシャワー

海外の人は個室型のシャワールームを使いたがる．高専では共同型の脱衣場ばかりなので，構造を一部変えるとよいのではないかと思う．

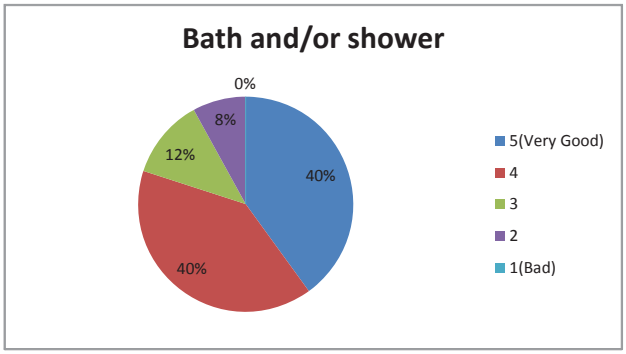


図３　風呂とシャワー

（４）食事

食事については，参加者の様々な要望（イスラム教徒用の食事，ベジタリアン等）に応えるのに苦労した．単品のおかず（素材があまり混ざらないもの）をもう少し工夫して出すと良かった．

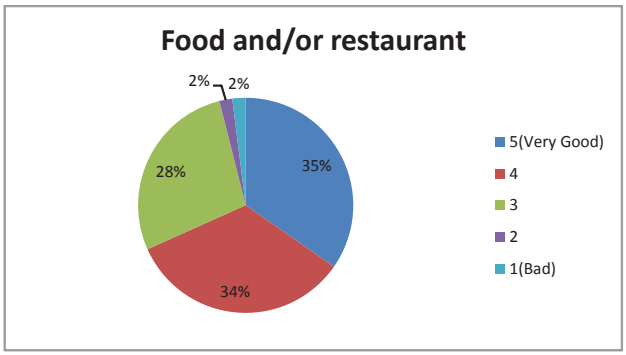


図４　食事

（５）開催時期

概ね問題ないという評価である．9月の中頃はまだ気温も高かったので，もう少し涼しい季節を希望する人が多く見られた．また，桜や紅葉などの日本的な風景が見られる頃に来たいという意見が多い．

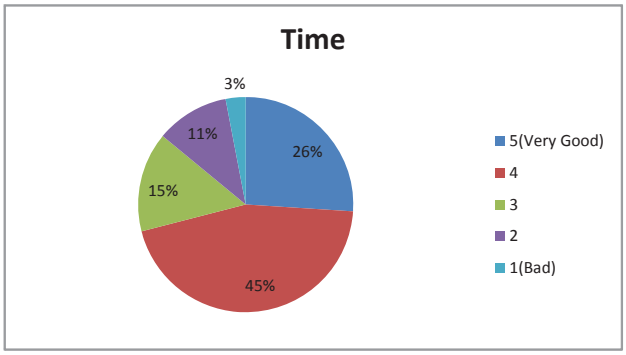


図５　開催時期

（６）期間

ちょうどよいと少し短いと答えた人がともに半数近くである．短いと答えた人は，日本文化をもう少し見学したいと言う意見と互いの交流をもっと深めたいという意見である．

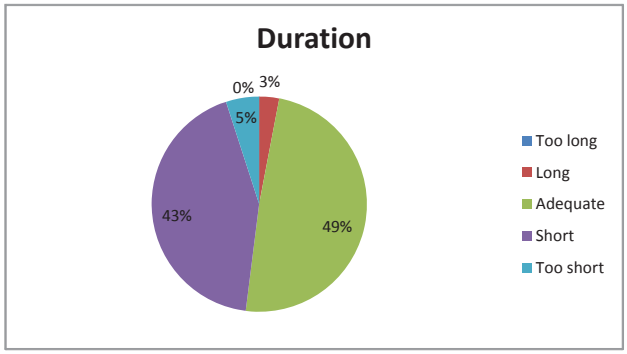


図６　期間

（７）案内

案内や情報については，概ね良好な評価を得ている．必要な情報が速やかに出されたため混乱なく過ごせた．標準的な案内で問題なかったという評価である．

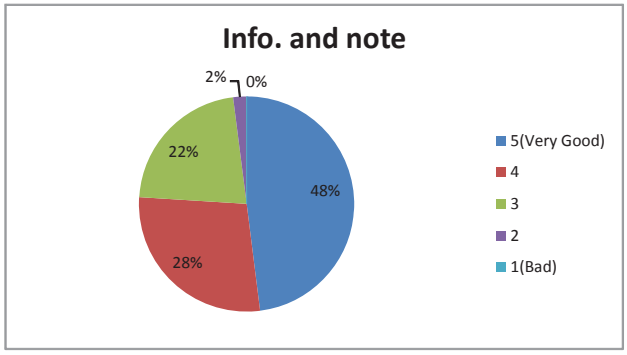


図７　案内

（８）来年もこのプログラムを人にすすめますか

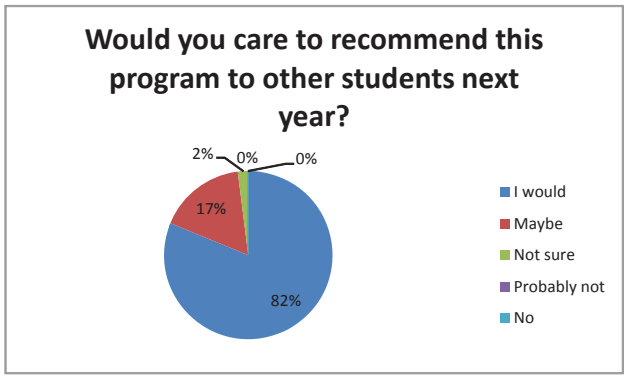


図８　人に勧めるか

かなりの参加者が人にすすめると答えている．その理由も，本プログラムが有意義であったという評価を得られた．

（9）プログラムの中で特に良かったもの

期間に実施した活動がほぼすべて含まれている．参加者の好みも十人十色であることを感じた．特に，好評だったのが，工場見学，明石海峡大橋，人と未来防災センターなどの学外見学と体験学習である．いずれの学科の講義も，良かったという意見が含まれていて，特に偏りがなかったのが特徴である．

（10）あまりよくなかったプログラム

特に悪いプログラムはなかったとする意見が多かった．このことからプログラム全体が好意的に見られていたことが伺える．大講義室での学生のプレゼンが長すぎるという意見と日本経済産業史についてはエンジニアによる講義が聴きたかったという意見があった．特にアジアの学生には日本の経済発展の歴史を知りたいという欲求が高い．

（11）全体の感想

このような機会を与えてもらったことへの感謝が多くみられる．帰国したら高専のことを母国の人にも紹介し，今後も友好関係を続けていきたいとの意見もあった．以下に，参加者と学生アシスタントの感想の一部を抜粋する．（原文のまま引用）

参加者 A

Okay, Thank you very much to Akashi National College to give opportunities joined this program. Because I really happy and I feel that this program is useful! For all of us, I can't forget it about the special moment, happy time, friendship. So I hope we can make friendship and never forget it. Arigatougozaimasu.

参加者 B

This program is an effective program to relate friendship of Asian countries, sharing each other about education, technology, disaster and the way how to solve, cross culture that's all mix into one in past in short time one week but here we still can know and understand each other. Hope I can follow and involved to this amazing program again next year.

学生アシスタント A

アジア各国の人々と交流ができたので，サポート側として参加した私達自身も色々なことを学び勉強になったし，よい経験になりました．

学生アシスタント B

とても楽しかったです．やはり異文化交流は楽しくて，もっと英語を上手く喋れるようになりたいと強く思いました．ありがとうございました．

## ５．運営上の課題

今回のプログラムでは，参加チームの募集から選考まで担当校の明石高専が行った．震災の影響もあり円滑に進まなかった面もあるが，海外公館の協力を得るには募集期間あるいは調整期間を十分にとる必要がある．

海外からの参加校との連絡をスムーズにするために，英語ができる事務職員を確保するなどの体制を整える必要がある．

事前の準備は，綿密にしておく必要がある．いろんな場面を想定して計画を立てていたが，実際にはいくつかの問題が発生した．シミュレーションなしで本番を迎えていたら，かなりの混乱があったであろうと予想される．

## ６．プログラムの効果

学生アシスタントにとって，今回の国際交流をきっかけに，より海外に対する興味関心が高まっている．現在も参加学生はフェイスブックでお互いの交流を深めあっている．海外からの参加学生にとっても日本体験はかなりのインパクトがあったようで，帰国後も日本のことを様々な場面で紹介してくれている．

また，引率教員を通じて海外の参加校と明石高専との間で交流が続いており，将来的には学術交流協定等の締結に発展する可能性が出てきている．ベトナムのホーチミン市工科大学と交渉を行っているところである．さらに，プログラムのホームページ等を見て，参加校以外の教育機関からも明石高専に問い合わせが来ており新たな交流が生まれつつある．インドネシアのガジャ・マダ大学は，明石高専の紹介により2012年度のアジアの留学生の高専体験プログラムに参加し，その後明石高専との学術協定の締結に向けた交渉を行っている．

明石高専においても，国際交流を進展させていこうという気運が高まり，積極的に学生や教員の交流を進めていく大きなきっかけとなっている．

## ７．異文化交流プログラムを通した異文化コミュニケーションの展開について

今後同様のプログラムを実施するにあたり，留意しておくべきことは，英語で展開することを前提にしてある程度の準備をしておくことが必要である．

想定されることは，高専紹介のプレゼン資料，キャンパス見学時の説明，日本文化の紹介，ものづくり体験授業や自由時間での英語によるコミュニケーションである．さらに長期にステイする場合は，共同研究等のさらに高度な内容でのコミュニケーションができるようになれば，高専における国際交流もより深まっていくように思われる．

本プログラムにおいては，学生アシスタントが海外の参加者の日常生活の世話やプログラムの中の各活動の説明を英語で行うことにより異文化コミュニケーション能力を向上させることに役立った．特にものづくり体験授業において，日本人と海外からの参加者が同じ問題解決に取り組むことにより，単なる日常会話を超えたコミュニケーションの機会を提供することができている．また，この経験はプログラム参加者の英語学習へのモチベーションも高めている．

写真１　Experiential learning

## ８．まとめ

国際的に通用するエンジニアの育成が求められるようになり，英語によるコミュニケーション能力の向上のためのプロジェクトが全国的に展開されている．

従来の英語教育は入学試験や TOEIC 対策となるような英文の読解，英文法，リスニングといった分野ごとの学習あるいは，英語によるプレゼンテーションの実践が中心に行なわれている．また，語学学習を補完するために海外の語学研修を実施することで一定の成果も上げている．しかしより実践的なコミュニケーション能力の向上を達成するために問題解決型学習（PBL）を取り入れた異文化交流プログラムを展開することが学生のコミュニケーション能力の向上に有効である．今後，学術交流協定が締結されてく過程で，どのようなグローバル人材を育成していくかを視野に入れてプログラムの内容を充実して展開していく必要がある．

本稿は，平成24年度高専機構教員研究フォーラムにおいて発表した内容を加筆・修正したものである．

## 参考文献

1）　留学生交流促進センター，平成22年度アジアの学生の高専体験プログラム報告書，（2010）．
2）　留学生交流促進センター，留学生指導と国際交流活動に関する特色ある事例集，（2010）．
3）　松田安隆，ハーバート・ジョン，高専における英語教育の現状と課題，日本高専学会誌，第15巻第2号，pp. 15-20，日本高専学会，（2010）．